

# 平成24年 酒田出身の人物 展示人物一覧

展示期間：平成24年1月4日～12月28日（2階常設展示室）

いけだ かめさぶろう  
池田 亀三郎（企業家）明治17年（1884）～昭和52年（1977）



酒田・浜町に池田亀蔵の六男として生まれる。

幼少のころ、書家である山口半峯の下で書を習う。

鶴岡の荘内中学校、旧制京都三高、東京帝国大学工科採鉱冶金科卒業後、三菱合資会社に入り、九州及び北海道の炭鉱に勤務。時の社長、岩崎小弥太に注目される。

日本タール工業（後の日本化成工業）代表取締役。戦後は率先して石油化学事業に取り組むとともに、業界の編成取りまとめに尽力した。昭和31年に三菱油化を設立して社長、会長、最高顧問となり、わが国の石油化学産業の基盤を確立した第一人者として著名。

昭和36年に経団連常任理事を務め、同39年には科学技術庁顧問を務めた。

たぐいまれな先見性の持ち主で、鹿島や四日市における石油化学コンビナート開発の先鞭をつけるなど、日本経済に多大な影響を与えた人物である。これらの功績により、昭和45年に勲一等瑞宝章を受けている。

かみあし とくさぶろう  
神足 徳三郎（船長）明治17年（1884）～昭和38年（1963）



神足熊吉の子として、酒田・上台町に生まれる。

少年のころから船員になる志を抱き、鳥羽商船学校に入学した。非常にまじめで、酒もたばこもたしなまず、港に着いても上陸もせず、留守居役を買って出たという。

第一次世界大戦中は、ポートサイドを拠点に、ドイツ潜水艦の攻撃の恐れがある中、マルセイユやロンドンに航行して輸送の大任を果たし、高く評価された。

大正12年（1923）9月1日に発生した関東大震災の時は、大阪商船の「ろんどん丸」の船長として横浜港に停泊していたが、震災により港に押し寄せた避難民を助けるために、港に踏みとどまり数千人の人々を救助した。

大正14年ころからは、移民船「さんとす丸」や「ぶえのすあいれす丸」の船長として、24,000人の人々をブラジルに送り届けた。神足船長は、移住する人々の面倒を親身になって見たことから、「移民の父」と慕われた。

英語のほかにポルトガル語、スペイン語にも堪能であった。

いとう きちのすけ  
伊藤 吉之助 (哲学者)

明治18年(1885)～昭和36年(1961)



須田惣太郎の子として、酒田・日吉町に生まれ、ろうそく屋・伊藤丹蔵の養子となる。

鶴岡の荘内中学校、旧制一高、東京帝国大学哲学科を卒業後、哲学会雑誌の編集に従事する。

大正4年(1915)、仙台藩士族の出である高橋てると結婚。妻への最初の注文が、貧乏に耐えてほしいということであった。そのため、新婚旅行の費用はすべて本代になったという。

大正6年、慶應義塾大学予科教授に就任。同9年にドイツに留学して哲学を研究した。昭和5年に東京帝国大教授・哲学研究室主任、同22年には北海道大学教授に転じて法文学部長となる。同26年、中央大学教授となって同33年まで在職した。

旧朝日村出身の宮本和吉、旧松山町出身の阿部次郎とともに、庄内の哲学三羽鳥といわれた。

日和山公園には「秋くれば いではの空は雲おもく くろずむ海の浪高ならず」の歌碑が立っている。

おぐら きんのすけ  
小倉 金之助 (数学者)

明治18(1885)～昭和37年(1962)



廻船問屋・小倉末吉の子として、酒田・舟場町に生まれる。

鶴岡の荘内中学校を4年で中途退学して上京。明治34年、東京物理学校(東京理科大学の前身)を卒業し、同38年に東京帝国大学理科大学に進んだが、家事都合により退学して家業を継いでいる。

明治44年、東北帝国大学理科大学設立とともに招かれて数学助手となり、大正5年(1916)、論文「保存力場における質点の経路」で理学博士となった。

大正14年に大阪の塩見理化学研究所の所長となって、昭和12年まで在任した。

昭和11年に「自然科学者の任務」を発表して、軍国主義に反対した。同15年に東京物理学校の理事長に就任。辞任後の同19年に黒森に疎開している。

昭和24年には東京理科大学の理事に選ばれている。明治、大正、昭和にわたる国際的な数学者であった。

日和山公園には「山王の祭も近きふるさとの 五月若葉のかぐはしきかな」の歌碑が立っている。

ねあがり とみじ  
根上 富治 (日本画家) 明治28年(1895)～昭和56年(1981)



酒田に生まれる。

鶴岡の荘内中学校を経て、東京美術学校（東京芸大美術学部の前身）日本画科に入学。結城素明に師事する。在学中に帝展第3回展に初入選している。この時の作品「雨後軍鶏」は、竹内栖鳳らの作品とともにフランスに渡り、巨匠アマンジャン（※）に激賞された。大正11年（1922）に「飼鷹」、同14年に「群鶏」が、いずれも特選となる。

昭和3年に帝展無鑑査、同11年に帝展審査員になる。

昭和14年、同志とともに日本画院を興し、同年、明治神宮絵画館に壁画「南部馬」を描いた。太平洋戦争中は、鶴岡に疎開して制作に専念。戦後は日展審査員として活躍した。

花鳥を最も得意とし、謙虚な性格の画家として著名。

※エドモン・フランソワ・アマンジャン……フランスの画家

あべ やえ  
阿部 八重 (看護婦) 明治31年(1898)～平成5年(1993)



阿部弥市の子として、旧上田村吉田に生まれる。

上田尋常小学校、本楯尋常高等小学校を卒業後、日本赤十字社中央病院救護看護婦養成所に入学した。卒業後、日赤本社病院に看護婦として勤務している。太平洋戦争中は中国に派遣され、将兵の看護や現地難民の救護に力を尽くした。

大正14年（1925）に、民間で初めて宮内省侍医療の嘱託の命を受け、昭和23年3月の退任まで、4人の内親王と2人の親王の出産時に、主治医の手伝いをしている。

戦後、横須賀市の久里浜国立病院の総婦長を務め、昭和23年からは久里浜の国立高等看護学院の教務主任となって、後輩の指導に努めた。同33年に定年となり、一時、酒田に帰ったが、日赤本社からの強い懇請によって、翌34年から日赤横浜病院に勤めている。

山形県人初のナイチンゲール記章の受賞者である。

かとう ちはる  
加藤 千晴 (詩人)

明治37年(1904)～昭和26年(1951)



加藤磯太の子として、酒田・利右衛門小路に生まれる。  
鶴岡中学、青山学院英文科を卒業。

卒業後は、京都の旧制第三高等学校事務局に勤務。その傍ら詩作に励んだ。事務局書記時代に、「四季」「西日本」「詩風土」などに詩を発表して、昭和17年には第一詩集『宣告』を刊行している。

晩年は失明し、敗戦直後に酒田に帰ってきた。苦しい生活の中でも詩作や論文、手記の執筆に励み、昭和21年に第二詩集『観音』を京都の臼井書房から出版している。

千晴は、自分の200余編の詩を、『花と遠景』『花嫁と襦袢』(※)『浪漫詩集』『石の枕』『みちのく』の5冊にまとめた。

没後の昭和27年に、兄の加藤丈策氏が『みちのく抄』、孫の加藤千晶氏が『厭離庵そのほか』の遺稿集を出した。

※襦袢(らんる)……ぼろきれ、ぼろ

きし ようこ  
岸 洋子 (シャンソン歌手) 昭和9年(1934)～平成4年(1992)



酒田市八軒町(現在の新井田町)に生まれる。

酒田東高等学校、東京芸術大学声楽科を卒業。

幼少のころから声楽家・加藤千恵の指導を受け、大学卒業後はプリマドンナを目指してオペラに専念したが、病のため二期会を退き、失意のうちにあった。この時にエディット・ピアフの歌と出会い、シャンソン歌手としての道を歩み始める。

昭和34年に銀座のシャンソン喫茶「銀巴里」でデビュー。翌年には第1回リサイタルを東京イイノホールで開いている。

昭和39年に「夜明けのうた」で、同45年には「希望」で日本レコード大賞歌唱賞を受賞した。

膠原病にかかりながらも歌い続け、昭和63年には酒田市特別功労表彰を受ける。平成2年に病気が再発。1年間の休養後、活動を再開したが、同4年12月11日に永眠。